

三島由紀夫の死と遠藤賢司の「カレーライス」 ー新たな美についてー

松谷茂樹 96/1/30 記 97/1 変更

三島由紀夫が1970年、自衛官たちの前でクーデターを論じ自ら命を落とした日、その中継をTVでみていたフォークソングの異色といわれた遠藤賢司が「カレーライス」を作詞した。

カレーライス 作詞作曲 遠藤賢司

君も猫もみんな
みんな好きだよカレーライスが
君はとんとんじゃがいもにんじんを切って
涙を浮かべて玉葱を切って
ばかだなばかだなついでに自分の手も切って
僕は座ってギターを弾いているよーん カレーライス

猫はうるさくつきまとして
私にははやくくれにゃーって
うーんとってもいい匂いだな
僕は寝転んでテレビを見てる
誰かがお腹を切っちゃって
うーんとっても痛いだろうにねえ
ははーん。。。 カレーライス

君と猫はちょっと甘いのが好きで
僕はうんと辛いのが好き
ふいふーん カレーライス
ふいふーん カレーライス

僕はこの小論文で、三島由紀夫の死と遠藤賢司の「カレーライス」という曲を通して、古い美、新しい美について論じようと思っている。僕は別段、新たな三島由紀夫論を与えようと思っていないし、新たな遠藤賢司論を試みようという訳でもない。唯、彼らは、僕

の思考の切掛けに過ぎないし、説明の素材に過ぎないかもしれない。しかし、僕にしてみれば、それらは、素材を越えて僕の言いたい事を象徴として完全に網羅していると思うのである。

1 美と死の関係

僕は最近、「美とはなにか」という事を考えている。そして、少なくとも従来の美は死と同意語のようなものではないかという結論に至った。以前からそう感じてはいたが、言葉として自分の思考に加えられたのは三島由紀夫の死後25周年忌の猪瀬直樹のNHKの特集番組等を見たことによると思う。三島の主張の僕のひとりよがりかもしれない受けとめ方は、次の通りである。

「死と対峙していた頃の軍国主義時代の方が平和ぼけした戦後よりもよっぽど生きていたと思えた。」

「何かのために死ぬというのが最もすばらしい人間の死である」

「人間の生を越える超越的原理、美と言うものが重要である」

と言うものである。

僕は「美は確かに死を意識している。」と思うのである。死は、非日常の最も特徴的な出来事であり、死は生あるものの最後の切り札である。原罪のためにその身を捧げたイエスのその死の美たるや、時を越え、場所を越え賛美的である。キリスト教の美はこの死にあるといっても過言ではない。

時を越え、場所を越え、普遍性を持った死は、二度と消滅する事のない(不死)の死なのである。そういう死を越えたところの死が絶対の死である。この絶対の死が普遍性を象徴し、絶対的な美と結び付いていると考える。そのような死に付随する美は無機的である。絶対性を望んでしまう以上、その目指すべきところは生、あるいは日常の暮らしの匂いからより遠いものである。物理や数学の目指す真理も無機的であり、この種の美に属する。完全な肉体や、完璧な建築、完全な調和などというものもそうであるように思う。数学者ガウスは、弟子が死んだ日にその弟子が何秒生きたかを計算してしまった。数字の美しさは日常の哀しみを越えるのかもしれない。

戦争などというものも、また、正義などというものもこの無機性と普遍性そして、絶対性と無縁ではないと思われる。美のために人は人も殺せるし、人の暮らしを壊しもできる。美のために、何かができる、このすばらしい官能!!美(正義)に人は酔い、官能的になり、自らの死を恐れはしない。

数学者オイラーは、計算という美のために計算をしすぎて失明する。美のために、片手片足を失うという話を僕たちはよく聞くように思える。

逆説、この普遍性のため、美は愛となり、自己犠牲(自分の死)を伴って、人を救いもする。どちらにしても、美(正義)の為に死に得るあるいは自分を犠牲にできるという喜びは、生を破壊する口実として最も適切であり、最大の官能である。人は、美(神)のために、自分を捨てて、人を救う事に精をだす。

しかしながら、僕は思うのである。死に向き合った、死に付随する美を追及しては、何も今までと変わりはない。普遍的な美の存在など、絶対的な価値というものなどないというのが、マルクス哲学を経た現代哲学の教えるところである。所詮普遍をうたった価値などは、最大公約数的な意味しかないのである。特定の宗教あるいは民族あるいは思想にとっての普遍性ならば、「普遍」とは言えない。普遍性を目指さない新しい価値はないのかと思うのである。死に付随しない美はないのか？というのが僕の問題意識である。

一見関係のないと思われる環境問題にしても、ある種のこの美の価値観の上にたっているのではないかと思うのである。成長は、破壊を伴い、破壊は取り返しのつかない負の遺産を人類に残す。人々の暮らしのため、より合理的（これは一種の美的感覚であると思う）になるために建設を繰り返し、より美的になるために、流通（これはガソリンの浪費であり、環境を破壊する）が発達する。観光をうたい、自然が消えてゆく。さらには、環境問題に最も遠いと思われるところに、環境破壊は住んでいる。環境破壊を叫ぶ人々が飛行機で世界各国を飛び回るといふ事に矛盾を感じはしないだろうか？環境破壊を叫ぶ人々の会合がクーラーの効いたモダンな建物のなかで行われる事に矛盾を感じはしないか？例えば、芸術は、環境破壊と無縁だろうか？陶芸のひとつにひとつにこだわりのある陶芸家が気に入らない陶器を割る。それを美の追及と手放しで人は誉めるだろうが、割られるためだけの為に少しの炭素が二酸化炭素に変っている事は事実である。「この黄色を出すためには」と試行錯誤を繰り返し、画家がカドニュームの混じった絵の具を「失敗だ」と叫び捨てる。その為に自然界にない化学物質が放出される。こだわりのある美食家が、醸造酒の入った醤油をつかった料理を「自然でない」と流しに捨て、川が海が少し汚れる。美しい風景を見たさに写真家が人の入っていない山にオフオードのバイクで入る。自然派を自認するアウトドア好きが4輪駆動で入る。自然派の作家が前人未到の荒野に小屋を作る。自然が壊れる。偉大な数学家が論文を出し、紙となるため樹が消え、二酸化炭素が少し増える。日常とは異なったところに美が存在すると思い、その普遍的な美を追及する。その追及を手放しで再びすばらしい事、つまり美であると認める。しかし、そのような普遍的な美のために、人のできる事は破壊にすぎない。20世紀後半になり、皆がこだわりを持ち、美に目覚めはじめた。皆が食べる事から解放され、絶対的な美を意識し、あたかも不死薬を捜すかのようにこの世にもしかしたら存在しないかもしれない普遍的で絶対的な美を捜し求めはじめた。そして、環境破壊。両者は無関係であるとは思えない。

僕自身、俳句をし、絵を書き、物理や数学の論文を書く。クーラーは好きだし、寒いのに弱い。こだわりのために世界を汚した事は数えられない程ある。僕は、このような美の世界（合理的な世界）の外側にいて批判している訳ではない。僕はこの中にいるのである。この中の世界にいたことが罪ならば、僕は同じ罪をもって、告白しているに過ぎないのである。

それを良しとするか悪しとするかはもちろん価値観に依存する。僕の言いたいのは、そういう事実を目をそむける事なくその事実を直視したいということである。

また、論理的な美、正義のために戦争が起こる。湾岸戦争において、他国籍軍は正義を主張した。しかし、いままでかつて正義を口にしない戦争などあっただろうか？いつでも、仕掛ける方も仕掛けられる方も正義の為に戦争は起こるのだ。大東亜圏もある種の「正義」であったの事は否めない。少なくとも、新聞はこぞって正義であると論評した。正義

と口にする時、誰のための正義かを見極めないとならないのだ。普遍的な美とか普遍的な正義などないのだから。

正義や美の評価というものは、煎じ詰めれば「美は美しい」だとか「この正義は正しい」だとかになるのである。これらのテキストはなにもいっていないのに等しい。「AはA」を繰り返すだけの存在に過ぎない。論理は回転して元の場所に戻るのである。

例えば、狸と犬の分類を思い立ったとして、自分で分類を始めたとすると、「耳はどうだとか、こうだとか」思い立つのは、自分の頭の中にある狸像と犬像を比較して、その差異を言葉にするだけである。僕たちの頭の中にすでにある種の狸像と犬像が存在して、狸と犬の差異を反芻する事で認識するのである。それらの狸像、犬像は、犬たる絶対的な対象があってまた、狸たる絶対的存在（例えば、生物学的分類）があって、その分類の元に形成されるのではないのである。その人の生い立ち、経験を経て狸像があるいは犬像が形成されるのである。最終的に明らかな事は、「狸は狸」あるいは「犬は犬」という言葉でしかない。しかし、その言葉でさえ、言語を変えれば異なった結論をだす。英語では、狸は raccoon dog であり、英語を話す人にとっては狸は犬の仲間ではないのである。つまり、煎じ詰めれば「狸は犬」というのが英語を話す人にとっての狸像である。そして、正義や美もその個人の属性によって決定される「AはA」という何も意味をなさないテキストに支えられた程度の正当性しか持ち合わせていないのである。それは、狸を正義に、犬を悪に見立てて、正義と悪を分類するようなものにすぎない。つまり、既に個人にある独自の（民族や、文化や、宗教や言葉、生い立ちに強く依存する）「正義像」「悪像」に照らし合せて分類するにすぎないのである。（例えば、何らかの討論会の合理的なあるいは科学的な議論によって自分の「正義像」などというものが根本から変わるなどという事があるだろうか？ 長い時間聞いてとしても、自分と同じ「正義感」あるいは、自分と近い「正義感」の人を探して、その意見に同調するだけである。つまりは、討論会などというものは自分の「正義感」をトレースするだけにすぎないと言っても過言ではない。確かに記号論的には、自分の思いをシニフィアン化（文章化）する快感は存在しているのだが、注意すべき事はそのような快感は実に感覚的なものであり、脳内麻薬とかの意味で実に肉体的なものである事を認識するべきであると思う。）

しかし、この事だけは確かである。そのような普遍的でありようのない美があたかも普遍であるような錯覚の下に、つまり、美という名の下に多くの愚行がなされていたと言うことである。（もちろん、この愚行というのも一種の美的感覚の否定であるから、「美は愚」というテキスト程度の意味しかないかもしれない。もちろん、「美という名の下に多くの「正義」がなされてきた。」というテキストを否定するわけではない。）僕の主張は、上述したような美を求める事をやめる事こそが新しい美の始まりではないかと思う事である。

2 なぜ、人は美を求めるか？

なぜ、人は美を求めるかをここでは考えてみたい。

人は生後、母親の乳房から母乳を得る。乳房は乳児にすべてを与える。乳児にとって、乳房は絶対であり、完璧である。乳房は栄養を与えてくれるものであり、初めての社会で

あり、遊び場であり、おもちゃである。乳房は、乳児のほしいものすべてを与えてくれるが、ひとつだけ与えてくれない。それは、絶対性である。乳児自身が乳房になれないという事実である。その事によって、乳児は深いフラストレーションを感じる事となる。これは、今世紀初頭の精神病理学者メラニー＝クラインの説である。人間の絶対性の切望はこの母乳体験にあるのではないだろうか？

一方、精神病学者ラカンは「他者」という概念と「言葉の限界」という事実が重要であり、二者には強い関係がある事を指摘した。言葉の限界とは数学者ゲーデルが証明した「数学を操る有限の公理系は矛盾を含む」という不完全性定理と深い関わりがあるものである。しかしながら、もっと身近な例としては、集合論における自己言明の矛盾性がある。つまり、

$$X = \{x|x \notin X\}$$

という集合は矛盾をふくむ。これは「私はうそつきだ」という言葉と同等である。本当にうそつきなら、この言葉は嘘であるし、正直ならまたこの言葉は矛盾を産む。

ラカンは「言葉はそれ自身、限界をもつ」と主張する。自分について語ろうとすると、言葉はその効力を失うのである。「自分が何物であるか」という問いに対して、答える術がないのである。自分が自分を語るとき、それは、「私は嘘つきだ」というのと同じ、自己矛盾に陥るのである。

デカルトのコギト、「我思う故我在り」という言葉も結局は「「「「「我思う故我在り」と思う我在り」と思う我在り」」」」であって、何も確信的なものとなっていない。「美は美しい」となんな変わらないのである。近代哲学の根幹をなしたものがこの程度の正当性しかもたないことに気づくことが現代哲学の始まりであった。

人間は、乳児から、成長する事によって言葉を得、多くを思考できるようになれるが、その言葉は自分について何も語れない。「自分が何物のか」という問いに、言葉の持つ原理的な限界のために答える事ができないのである。それ故に、「自分とは何か」に迷う以外にない。

自分を鏡に映し、自分の存在を確かめる。しかし、それは他者を見つめる目で鏡の中の自分を見る事によってしか確かめられない。つまり、逆に自分を他者の目となってで見つめられない。他者を通してでしか、「自分は何物であるか」の答えを見いだせないのである。乳児の際、そして、思春期に鏡は大きな役割を果たす、「自分とは何か」の問に答えるために、その時期、鏡を飽く程眺めるものである。ここでいう鏡は、物理的な本当の鏡である必要はない。写真や映像でも構わない。(映像に写ってしまった際、その自分を眺めたい、あるいは、写った写真のなかの自分を探してしまう、という心理は、日常生活で起こりうる事である。これは、「自分とは何か」という不安の顕れではないかと僕は思うのである。) 更に、鏡はもっと他のものでも構わない。他人との関係であっても構わないし、他人の心のなかに映る自分であっても構わない。(つまり、親または、陶醉したあるいは尊敬した他者に誉められる事によって自分の優位性を確かめ、あるいはけなされる事によって自分の劣等性を確かめる。)あるいは、その鏡は、偏差値のような数字であっても構わない。自分は何物であるかを答えてくれるものであれば何でもよいのである。

自分については何も語れない言葉しか持ち合わせていない以上、「自分とは何か」を語るものは他者でしかない。それならば、「自分とは何か」を語ってくれる他者を欲しはしない

か？ 「自分とは何か」を語ってくれる他者、それが、宗教であり、それが、学問であり、愛国心であり、道徳であり、正義であると考え。例えば、宗教人であれば、宗教の美德というものさしで「神」によって「自己の位置」を定めてもらう事で、「自分がどのようなものなのか」という問に答えて貰う。自分が神に仕える者として、どれだけ神に近いことによって自分とは何物であるかを答える。また、例えば企業人であれば、企業的美徳というものさしで「企業」という他者によって「自己の位置」を定めてもらう事で「自分とはなにか」の答えをだそうとする。そのとき、自己の中に無意識に存在しているそのような他者という鏡に美德として写るもの、それが求める美ではないのか？(どんな革新的な画家であっても彼が属すコミティーにおいては、彼の目指す美はそのコミティーにおける美德に過ぎない。一見、アナーキーに見えても、彼の生命を、美的感を委ねる他者にとっては、実に彼は誠実な純朴な存在にすぎないかもしれないのだ。) 更に、自己の生命も捧げているかもしれない特別な他者は間違いを犯さない存在であると信じたいと思うのではないか？それ故、そういう他者に完全性を求めはしないか？そのような美的感覚が完全であると信じる事で、そこに身を委ねる自己を安心させたくはないか？そしてその完全性を先天的なものであると信じはしないか？このとき、この完全なものへの憧れ、つまり美への憧れは、乳房への願望と重なりはしないか？

「乳児のときの原体験としての乳房」と「自分とは何か」という疑問に答えるべき対象としての特別な他者の存在」とは、かならず重なりと僕は思っている。すべてを与えてくれた乳房のように、すべての疑問に答えてほしい。そして、そう、答えてくれたと思えたとき、人はその思いのために、乳首を含みながら乳児がまどろむように、死に至れる。これを人は正義と呼び、その正義のために、時に人は人を殺し、時に自分を殺し、時に他人を救えるのではないだろうか？そして死は絶対性を内包している。

僕は、このような他者の存在と所謂美の存在は無関係ではないと思うし、トポロジカルに連結した事象であると考え。

完全であった乳房からの離別と言葉の獲得はほぼ同時期である。母乳からの離別と共に得た言葉は不完全であれば、完全性の喪失に関する絶望は人の一生を覆い尽くす。不完全な言葉のために、「自分とは何か」を語れない。そのフラストレーションのために、人は完全を求める。完全は乳房を意味し、乳房は美を表す。母乳(美)に到達できない絶望の為、あるいは母乳(美)に包まれる恍惚感の中で人は(自己あるいは他人の)死を選び(あるいは他人あるいは自己を傷つけ)、死は時を越える完全を意味する。

3 日本人の美について

古代日本語には、natureを表す単語を持ちあわせていなかった。「自然」は中国語からの借り入れである。自然を表すシニフィアン(表すもの)がなければ、シニフィエ(表されるもの)即ち、自然という概念が存在しないというのが記号論の教える所である。この中国文化の流入がある意味で完全でなかったころの万葉の時代(あるいはそれ以前)においては、即ち、「自然」なる語が一般化されていないと思われる万葉の時代以前においては、成人した日本人にとって自然は乳房のかわりをしていただけではないかと僕は思い始めている。

「る、られる」の構造や神に対する信仰などにそのような事が顕れていると思う。

「る、られる」の構造というのは、大野晋によって示された構造である。(記号論批判をすると、共時的研究は通時的研究と共に存在しなければ記号を唯操るだけに過ぎなくなると思っている。結果の解析しかできない現代哲学、記号論ではなく結果を予測する学問が必要と思われる。大野晋の研究は、言語を通して、日本人の根幹を鋭くついていると思う。例えば、「されば」、「さようなら」、「じゃーね」という各時代の日本人の別れの言葉は、then を基本として、「そうであるならば」という間(ま)で別れるのである。これは通時的な構造である。これを流行りの記号論学者のように、「じゃーね」だけを若者言葉として取り上げていく共時的に研究しても何にも、その構造は判りはしないと思うのである。) そもそも、日本人の可能を表す言葉として「できる」がある。この古語は「いでく」である。どちらにしても「出て来る」の意味である。古代日本人(農耕民族)にとっての出て来るとは、「黴が出て来る」「芽が出て来る」と云うものである。田を耕し、種を蒔き、水を与える、そしてひたすらに「芽が出る」のを待つのである。「芽がでるとかでない」とかは、これ以上は「自分の力ではどうしようもない」事である。黴にしてもそうである。また、可能を表す助動詞として「る、られる」がある。「る、られる」は同時に、自発、尊敬、可能、受動を表す。まず、受動を考えよう。「女房に逃げられた」あるいは「母親に死なれた」は、受動として日本人は受けとめるが、これは西洋語では、受動にはならない。I was died by my mathor とは云えないのである。これらを「女房が逃げた」あるいは「母親が死んだ」とを比較しよう。「。られた」というと「私」は一生懸命つくしたのに、「逃げられた」あるいは「死なれた」という感じがしてくる。つまり、「自分ではどうしようもない力によって、そうなった」というのを意味しているのが、「女房が逃げた」と比較すると判る。「女房が逃げた」なら「おまえが悪い」という事になるが、「女房に逃げられた」と云われれば、「かわいそうに」となるのである。さらに、尊敬にしても、「社長は会社をでられた」というのも「社長が「私」にとって、どうすることもできない存在である」という事を意味していると考ええる。このような「る、られる」の存在を言語(思考方法)の中に内在しているのが日本語である。何かを「可能」にさせようとする時、自分の手で「might(力)」を使って、may となるようにする西洋人とは大きく異なる。

何かを可能にさせてくれるのは「何か自分ではどうしようもできない力」によると思っていたのが古代日本人である。その力とは神である。神とは古代日本人にとっては自然である。豊かな温帯気候の自然の中に居た日本人に豊かな実りを与えてくれるのは「自然」である。自然は神そのものであり、神は自然そのものである。それはまるで、乳児にとっての乳房のようなものであったと考える。自然によってすべてが与えられる。自然によって、すべての恵が与えられる。「何かを欲するとき、唯待つのである。」そうすると「自分ではどうしようもできない力」即ち自然によってそれは可能となるのである。

更に、自然は畏敬さえ与えてくれる。神は時に人を苦しめる。「カミナリ」は人々を脅かし、山火事を与える。「オオカミ」は盆地の外にある外部領域において、人の存在を消すものであった。古代日本人はそれらを「ねぎらい」「祭った」のである。「願い」の言葉の由来は「ねぎらい」から来て、「何かのためにこうあってほしい」と願う概念は仏教伝来の後であると言われる。即ち、古代日本人にとって、信仰は自然に対する畏怖から来たと考ええる。乳児が畏敬の念をもって乳房を吸うように、古代日本人は、自然に畏敬の念をもって

いた。そのような信仰もふくめ、自然は乳房のようなすべてを与えてくれるものであったと考えるのである。

この事は、草原で放牧しながら、他の放牧者と出会うと自分と他人との領域を「契約」によって取り交わしたり、あるいは、豊かであるけれど毎年洪水を起こす大河に暮らし、洪水の前後に自分の土地を正確に測量そして、他人との土地の区別を「契約」によって明らかにしなければならなかったナイル川近傍の人々の暮らしとは大きく異なる。実際、日本人の聖数が8あるいは9に対して、ユダヤ教は1（即ち、1神教）であり、1は契約する個人の象徴でもあると思われる。自然は愚かで、制御すべき対象として、相対化したために、「nature」に対応する言葉が生まれ、自然は制御すべきと思う信仰から、自然科学、西洋文明が生まれたのである。

すべてを（恐怖もふくめ）与えてくれる豊かな自然、前期の万葉集においては、三島が目指したような絶対の美を求めた形跡のない歌が多くある。自然を相対化していない。自然という概念がないまま自然を描いている感じがするのである。現代人が「自然って美しいはね」などと非日常的に感じるものとは全く異なる、いわゆる「空気のような存在」として自然を認識していたように感じるのである。それは、母親に抱かれる乳児のように、乳児が畏怖や甘えをもって乳房を思うがごとく、畏敬や畏怖やそして甘えを伴って、古代日本人は「自然の中にいる」のである。そうであるならば、絶対性は必要ないように思われる。絶対的他者の必要性が現代人と比較すると希薄であると考えられる。

他方、恐らく、「自然」という語を知った（つまり、概念として、自然というシニフィエを受けとめた）貴族達の作った古今和歌集にいたっては、美を意識し、「花は散るべし」「梅は香るべし」なる日本人の美的感覚が生まれる。「花（桜）が散る」美しさのために、切腹なる日本の美的感覚も生まれたのだと思う。この「花は散るべし」「梅は香るべし」の美的感覚は、natureを相対するものとして認識し、自然と人間の暮らしに一定の距離が見えるのである。と同時に、自然はもはや、古今の作家にとって乳房たるものではなく、相対するものである。自然は外から眺めるものである。そうして、古今の作家達は絶対なる他者、即ち、絶対的なもの「美」を求め始めている。そのようにして、できたものが日本人の美的感覚であるといっても過言ではない。三島の目指した美は古今にその原形があるように思えるのである。

更には、日本語において、特に古代日本語において、主語がないと言う事実は、「自分は何物か」なる疑問を持ちえない言語構造ではなかったかと思われる。「我」を多くの場合使わない以上、「われ」に対するアイデンティティーなるものは必要でなかったように思われる。もちろん、君に対する「われ」という感情の主体としての「われ」がなかったといっている訳ではない。しかし、少なくとも「我思う故我在り」のような考える「われ」、誰か（例えば、神とあるいは経済的な対象）と契約を結ぶような「われ」というような西洋自我はそこには存在していなかったのではないか。そのように想像される世界、それが万葉の時代であると思う。

これに対して漢詩における我、あるいは、時代をくだり、中国ではなく、今度は西洋から、Iの訳語としての「我」が登場し、例えば、漱石等の近代自我が、「我は何のか」に悩む事になるのではないか？僕は近代自我の目覚めは、仏教伝来「古今」の次のステップの日本人にとって「絶対なるもの」への願望の始まりではないかと思っている。

最後に、日本人における他者の存在についてコメントしたい。上記のように述べると(古代)日本人には他者の存在が全く必要がないように思われるかもしれない。しかしながら、自然を「自然」という言葉で認識しない以上、どこまでが「自然」でどこからが「自然」ではないのかという境界もはっきりとはしない。つまり、自然と個の隔たりがはっきりとしないのである。その事は日本人の空間意識、「ウチ」と「ソト」との言語構造に顕れている。と同時に個と他との区別がはっきりしないという事実は個の共同体との連帯に現れる事となる。「和」という「何だか知らないけれど大いなる力(共同体の流れ)によって決定される」共同体の意志に縛られる事となる。つまり、共同体の意志が他者となって、自己の位置を決定する事とがあらわれる。共同体の意志によって美(善悪)を決める事、これが日本人の「恥」の構造であると考えられる。従って、(古代)日本人にとって、絶対的他者が全くないというわけではないのである。しかし、個を取り巻く外界(自然、共同体)がその絶対的他者となっている事には変わりがないのである。

4 新たな美について

僕の目指したい美は、万葉の時代の美である。それは、暮らしにたった美であったと思える。僕は「生」とともにある美を模索したいのである。生に付随する美は、時代を越えない。その人の生きている時間と同じ時間しか存在しない。普遍性のない、成長のない美はないのであろうか。そこに、逆説的な普遍性(それが万葉集の文芸的な価値であるとおもうが、)があるのではないだろうか？

僕は遠藤賢司の「カレーライス」の歌に可能性を見る。カレーライスは三島の死のTV番組を見ていた遠藤がその日に作ったと言われる。

詞の中で、おなかを切って痛いだろうなといい、ひたすら、愛猫と妻のつくるカレーライスのできるのを待つという歌である。美とは何か？正義とは何かを問うて、眉間にしわを寄せて死に行く三島に遠藤は「痛いだろうに」と答える。この三島の壮絶な死をいとも簡単に「痛いだろうに」と答えてしまうところにこの詞の奥深さがある。

背景にあるのは、暮らしである。暮らしの中にあれば、三島が眉間にしわをよせた事が馬鹿らしくみえるのか？更には、三島の死すら、相対化されてしまうのであろうか？それを、実にあっけない詞にしてしまっている。この詞が詩としてすばらしいか否かは別として、非常に象徴的なものとなっていると僕は思うのである。人々から忘れさられても、消えてしまってもそれで良いという感じの詞の構成であり、潔ささえ見える気がするのである。しかも、自分の貧しさをヒロイニクに書く四畳半フォークとは明らかに異なる確からしさがある。「自分は何か」を問うことを止めたノブトさがあると思うのである。また、他人(他者)の評価を恐れない何かがある。三島が他者(自分の中の他者も含め)を意識し、他者たる美のために死を選んだのに、遠藤は、自分のためだけに歌を歌っているように思えるのである。

僕は、ここに、美の新たな可能性を信じたいのである。僕の目指したい美は、他者を恐れない美である。上とか下とかを超越した美である。自分のため(自分のなかの他者のためでなく)に描く美である。

ニーチェが「神の死」を叫び、キリスト教批判をした動機は、キリスト教において、「敵を愛せ」というテキストがニヒリズムを産むと感じたからである。自分の生のためでなく、敵（自分の生を脅かす存在）を愛するというの自分自身を否定する事であり、ニヒリズムであるというのである。さらに、素朴な生への執着を基にした哲学を構成しようとして出てきたものが、「ツラツーストラかく語りき」であると聞く。僕は、ニーチェの批判は、キリスト教への批判ではなく、自分のなかの他者（絶対なるもの）への批判であると考えている。自らの死をも容認してしまうその自分の他者への批判である。それは、宗教、民族、言語からの自由を歌ったニーチェの考えに沿ったものであると思っている。そして、僕は、自分の生にたった美を目指したいのである。それは、けっしてエゴイズムを肯定するものではないし、そうあってはならないと感じる。

僕はニーチェほど潔癖に他者を否定はしないし、自分自身の古い美への欲求を否定はしない。エゴイズムを肯定しないための他者の介入に対しておおらかでありたい。但し、他者への認識、即ち、自分の中に他者が存在し、その他者の価値観の下に、自分の生は脅かされていると云う事実を認識する事は必要であると強調したい。

もちろん、そもそも、記号論においては自己などと言うアイデンティファイされたものはないかもしれない。自己を構成しているのは多くの他者に過ぎない。それならば、そうとして、自分のなかの他者の融合としての、そのつながりとしての自己既定は可能ではないか？原始生物が集まる事によって、集合体としての生物として個性を持ったように、他者の集合体としての自己はアイデンティを持つのではないか？その上で、素朴に自分の生を基本にした美は存在しないのだろうか？

「自分とは何か」を問う事を止める自己は構成できないだろうか？あるいは、「自分とは何か」という問いに答えを求めない自己は構成できないだろうか？その事によって、絶対性への憧れを絶ち切る事はできないのであろうか？エポケー（判断中止）の壁で自己を囲む事によって、自分を漠然として認めてしまう事が可能であれば、それはポストモダンになり得ないだろうか？

「自分とは何か」を問わない事は、近代自我に目覚めたものにとって最大の苦痛である。TVと富は、現代人に「近代自我」を流布させた。「日常に埋没した自分、自分とは何だったのか」という問は近年よく聞かれる言葉である。そもそも、「日常に埋没した自分」というものが疑問なしに悪であると考えてる事自身が、コギトの神話に似ている。近代自我の「自分を他者によって定めてもらわないと生きられない」という切望に端を発すると考える。デカルトは、この切望のために、コギトという考える自我をもって自分の座標とした。他者の存在なしに生きられない西洋人、イスラム文化人は宗教という、あるいはイデオロギーという他者なしには生きられない。その点、数年前までの日本人が宗教に無縁だったのは、「近代自我」が大衆レベルにまで広がっていなかった事と無縁ではないし、最近の宗教ブームが近代自我の流布と無関係ではないと思うのである。

しかし、「自分とは何か」を問う事を止める自己は構成できないだろうか？あるいは、「自分とは何か」という問いに答えを求めない自己は構成できないだろうか？その事によって、絶対性への憧れを絶ち切る事はできないのであろうか？それは、ニーチェのいうように「超人たれ」とする強い自我が必要であらうか？

僕は、カレーライスに可能性を感じるのは、弱い自我しか存在していない事である。「考

えない自我」がそこにはある。美には至らないかもしれないが、可能性を感じるのである。遠藤のカレーライスに（深刻なものを平然と受けとめられる力に）可能性はないかと思うのである。

「自分とは何か」を問う事を止める自己を構成する事あるいは、「自分とは何か」という問いに答えを求めない自己を構成すること。それは、そのような概念のなかった万葉の時代に近くはないか？そして、新たな美を探したい。それがポストモダンの美ではないかと思うのである。

実際、ピカソはそれができたのではないかと思うのである。彼は、絶対的な美の否定に立ってキュービズムを提唱したが、絶対的な美の否定という、消極的なものではなく、1945年以後の作品を見るとあらたな美を根本から提唱しているように思えるのである。つまり、彼の芸術は生活そのもののように思うのである。子供が産まれれば、喜びの絵をそのままに描く。皿をみたら皿に絵を描き、魚を食べて骨をみれば新たな皿をつくり、ピンをみたら、絵を描く。他者の存在なしに自分のために美を創造していたように思えるのである。つまり、描きたいから描いているにすぎないのである。

僕は他者の存在、即ち、宗教やイデオロギーや道徳とかを否定するものではない。絶対的な美への憧れすべてを否定しようとは思わない。僕は実際、物理や数学や芸術が好きである。そして、やはり物理や数学や、詩や俳句を書きたい。しかし、僕はそれらの絶対性を剥いで「自分が好きなもの」という唯ひとつの自分の中の価値観のみを支えにして美を求めたいのである。

記

このエッセイは96年1月末に僕の友人達に読んでもらうために個人的な立場で書いたものである。従って、もともとは全くプライベートなものである。しかしながら、内容的には真摯に考えたものではある。オーム事件もあり、もしかして運が良ければ人々に影響を与える職につくかもしれないという事もあり、自分自身の中で最近の出来事を総括して置きたかったというのが本音である。

今回、掘さんに基礎物理学研究に載せたらと勧められ、多少、文章のわかりにくい部分を変更したが、全体としては書いたときの気分を削ぐことのないようおおきな変更はせず、適当でないと思われる部分もそのまま残すようにした。そのため、わかりにくさはあまり改善されていない。

一部、乳房というのは、本来、母胎ではないかという指摘を友人から受けた。母胎はすべてを与えてくれるものであり、乳房を母胎に読み換えても、上述の文章はなりたつ事に注意してほしい。すべてを与えてくれるが、自分が母胎にはなれない。また、母胎に帰る事ができない事で、人間は孤独を感じるのである。母胎のように自分を包んでくれる絶対的なものを欲するというのも、母乳よりインパクトが強いかもしれない。実際、羊水に浸かっていた時が最も人間にとって幸せであり、「産声は苦痛の叫びである」という認識も現代哲学の世界ではある程度容認されているし、「人が自動車を好む」のはそこが擬似母胎であるという事もいわれている。実際、自分の愛車に乗る（今は持っていないけど）と妙に

落ち着いたりもする。

しかし、このような指摘も文章を更に混乱させるものとして今回あえて、反映しなかった。論理に飛びがあるところがあるように思うが、その部分に関しては、改めるべきところは改めて行こうと思っている。ご指摘を願いたい。

最後に、読みづらい文章を丹念に読んでいただき、励ましてくれ、基礎物理学研究に載せる事を勧めて下さった掘さんに本当に心から感謝します。ついでながら、土曜会という場のお陰で僕はいろいろ成長させてもらっています。